

動詞「訪れる」と格助詞

A Note on *Otozureru*

山西 正子
Masako YAMANISHI

Abstract

This paper deals with a co-occurrence relationship between *otozureru* and a case particle *ni*. In modern Japanese, *otozureru* is used to mean “visit” or “come.” To indicate the arrival point, we generally use the case particle *wo* as *Taro ga toshokan wo otozureru*. However, although it is used less frequently, the case particle *ni* is used as *Kitaguni ni haru ga otozureru*. The author would like to indicate that the case particle *ni* is also used in various sentences. The case particle *ni* is used when the subject is a natural phenomenon or an abstract notion. It is also used when the subject is human as in *Chuusonji ni ookuno kankoukyaku ga otozureru*. *Meikyou Kokugo Jiten* describes that a co-occurrence relationship between *otozureru* and a case particle *ni* is rarely found in cases where the subject is human. In this study, the author reveals that this co-occurrence is not rare in modern Japanese.

Keywords : *otozureru*, *ni*, *wo*, intention, natural phenomenon

キーワード：「訪れる」、「に」、「を」、意思、自然現象

【構成】

- 0 本稿の目的と問題のありか
- 1 辞書の記述と日刊紙の用例
- 2 近代の用法
- 3 現代語における「に」との共起
- 4 まとめ

0 本稿の目的と問題のありか

0.1 本稿の目的

本稿は、現代語の動詞「訪れる」と共起する格助詞について考察し、以下の3点を指摘する。

- ① 到着点を示す格助詞は「を」が優勢である中で、「に」の例が散見される。
- ② 自然現象・状態・抽象概念が「～(到着点)に訪れる」のように、「に」と共起することは知られているが、「ひと」が「～に訪れる」も使用されている。この用法を「まれ」とする辞書もあるが、現状は「まれ」とはいえなくなっている。
- ③ 「に」との共起が許容されるのは、「訪れる」が状況により「行く」「来る」に置換可能だからであろう。「行く」「来る」は、到着点を「に」で明示することが多いからである。

0.2 問題のありか

0.2.1 尋常小学唱歌「四季の雨」のばあい

稿者が動詞「訪れる」の存在を意識したのは、1955～57年の間（小学校高学年であった）に、担任の女性の先生（終戦の1945年当時、師範学校生だったと聞いている）から、教科書には載っていない尋常小学唱歌「四季の雨」を習った時である。

1914年の文部省唱歌であり、歌詞は戦後の小学生になじむものではなかった。先生がこれを教えようとなさった、その真意は分からない。「四季の雨」の第4節は

聞くだに寒き冬の雨、
窓の小笹にさや〜と
更行く夜半をおとずれて。
聞くだに寒き冬の雨。

とある（引用は『日本唱歌集』岩波文庫1958による）。

その時、小学生として奇異に感じたのは「夜半をおとずれる」という表現・・・なぜ「夜半を」なのか「夜半に」なのではないのか・・・であった。そして、「窓の小笹に」とあることには、まったく注意を払わなかった。

0.2.2 現代語のばあい

現代語の「訪れる」をめぐる、稿者の問題意識の起点を示す。それは、次に示す新聞記事にいささかの違和感を覚えたことにある。以下、考察は、2011年「朝日新聞」東京本社版を中心に行う。

すなわち、東日本大震災後の児童の心を思いやる宮城県松島市立野蒜小学校長の記事で、

- (a) 木島美智子校長（54）は心のケアにつながればと、始業前に全学年で一緒に遊ぶ

時間を週2回設け、毎月2回は球技大会を開こうと考えている。近くの梅の名所に全児童で訪れるなど新しい行事にも取り組むつもりだ。

(「朝日新聞」2011. 4. 11 20面)

とある、「梅の名所に訪れる」について、誤用と断定はできないが、何かなじまないものがあった。

稿者の意識では、「ひと」のように意思をもつ存在が「訪れる」対象の「ある地点」は、「～を訪れる」のように格助詞「を」で明示される。

そして、「に訪れる」は

(b) 少女歌手川田正子(34～2006) を都内の自宅に訪れ、音楽雑誌の編集部長としてインタビューした。(2011. 6. 11 be 1面)

(c) 馬淵澄夫前首相補佐官は30日、民主党の小沢一郎元代表を東京都内の事務所に訪れ、約15分間会談した。(2011. 7. 1 4面)

のごとき、「～(人物)を ～(場所)に」の一形式において使用されるものである。この形式に違和感はない。

なお、試みに、考察の起点になった用例(a)の掲載された4月11日の朝刊の例を確認する。この日は、前日の統一地方選挙を受けた特別紙面で、平常の40ページに対し、20ページであったが、稿者の、その時点での意識にそぐわない例はなかった。

(d) (稿者注・震災当日、防災無線で住民に避難を訴え続け、津波にのまれた女子職員の母について) 祈る思いで美恵子さんは待ち続けた。数日経って防災対策庁舎を訪れた。(2011. 4. 11 18面)

(e) (稿者注・ポトマック河畔の桜が、震災前日、日本に里帰りしていることについて) 里帰り桜の下で人々の笑顔の咲き誇る春が、遠からず東北の被災地にも訪れることを祈ってやまない。

(2011. 4. 11 7面「風」 立野純二 アメリカ総局長)

すなわち、(d)のごとく「ひと」が訪れる場合、その到着点は「を」で明示される。(e)のごとく「に」が使用されるなら、その動作主体は、複数の辞書の例文のように、「春」という季節なのである。

以下、ここでは、「訪れる」と「に／を」の共起に関して検討したい。

1 辞書の記述と日刊紙の用例

現在、通行の辞書における、「おとずれる」に関する記述を確認し、簡単に現代語における状況を確認しておく。

「訪れる」と格助詞の関係について、0.2.2で示した稿者の違和感の当否を含め、若干の考察が必要であることが分かる。「訪れる」の使用頻度が高くはないためか、例文を示すものの、詳細を記述する辞書は少ない。

1.1 自動詞・他動詞をとともに認める記述

1.1.1 『明鏡国語辞典』（初版2002 大修館書店）の記述

自動詞と他動詞の両用を認める記述となっている。

㊦ 〈自下一〉〔雅語的な言い方で〕季節・時間・状況などがやってくる。

「北国にもまもなく春が一」「ついに彼らにも破局が一・た」

㊦ 〈他下一〉〔雅語的な言い方で〕人がある場所や人の居所を訪ねる。

「月に一度は京都を一」「相談事があって田中家を一（＝訪問する）」

語法 「多数の記者が当地に取材に一・れています」のように、まれに自動詞としても使う。

ここでの、自動詞／他動詞の判断基準は、動作主体なのだろうか。「季節・時間・状況」であれば自動詞、「ひと」であれば他動詞と認定していることになる。

あるいは意味なのだろうか。語法が示すように、動作主体が「多数の記者」という「人物」であっても、「当地に」のように「に」と共起し、「来る」と置換可能であれば自動詞なのだろうか。

いずれにしても、1.1.1は、「ひと」が「～を訪れる」という用法を、「まれ」としながらも、指摘しているのである。

なお、意味による区別は、次の1.1.2に通じる。

1.1.2 『旺文社国語辞典』（第九版2002）の記述

上記1.1.1より簡単な記述であるが、自／他両用を認める。判断の基準は意味によるといえるのだが、動作主体によっても理解できる。

■（自下一）ある季節や状態がやってくる。「春が一」「時代の変化が一」

■（他下一）人のもとをたずねる。訪問する。

1.1.3 『集英社国語辞典』(第二版2000)の記述

上記1.1.1に通ずるが、この語を「文章語」とした上で、現代語に自／他両用を認める。上記の1.1.1や1.1.2とは、差異があり、判断基準は動作主体による。

㊦ (他下一) ① 人が訪ねてくる。「わが家を訪れた友」

② 人の家やよその土地を訪ねる。「パリを一」

㊧ (自下一) 季節やある状態がやってくる。「春が一」「幸せが一」

「人が訪ねてくる」のように、動作主体が「ひと」であれば「来る」意味でも他動詞であり、動作主体が「自然や状況」であれば自動詞である。

なお、古典語としては、下二段活用の自動詞のみを認めている。

1.2 自動詞のみおよび他動詞の記述

1.1の辞書3点は、現代語の「訪れる」に、自／他両用を認める。

一方、自動詞としてのみ記述するものもある。『岩波国語辞典』(第6版2000)『日本国語大辞典第二版』(2001)、『広辞苑』(6版2008)が該当する。

古典語をも合わせ、自動詞としてのみの記述である。

1.2.1 『日本国語大辞典第二版』の記述

語釈と近代以降の用例の一部を引用する。

① 音を立てる。声を立てる。

② 人のもとをたずねる。訪問する。おとなう。*五重塔(1891-92)〈幸田露伴〉

二七「厭厭ながら十兵衛が家音問(オトツ)れ、不慮の難をば訪ひ慰め」

③ ある状態、季節がやって来る。*真夏の死(1952)〈三島由紀夫〉「このころから、はじめて忘却が当然の権利のように夫婦の心に訪れた」*われ深きふちより(1955)〈島尾敏雄〉「そしてその女にどんな将来が訪れてくるものか」

1.2.2

時代が遡り、「現代語」の範疇には入らないが、『和英語林集成』は、初版、再版では名詞用法のみである(再版を示す)。

オトツレ, 音信, n. Message, word, communication, tidings, account, information. — wo suru, to send word. — mo nai, no tiding. Syn. TAYORI, INSHIN, SHOSOKU.

3版(1887年)にいたって、初めて動詞としても記述するが、ここでは、

OTOZURE, -RU オトズレル t. v To communicate, send a message

とあり、「t. v」すなわち他動詞である。具体的な移動行為には言及せず、通信を含めて、他と情報交換することが「おとずれる」と認識されたのである。あるいは、古典語の「おとづれ」がしばしば「文のたより」を表したことに影響されたものか。例文もなく、それ以上の考察は及ばないが、編者には「他動詞」という認識があったことが認められる。

このように、「訪れる」に関しては・・・「訪れる」に限ったことではないが・・・、自／他の判定にも、また判定の基準にも、統一見解はないといってよい。

1.3 日刊紙の用例

日刊紙の用例について、簡単に確認しておく。

上記の辞書1.1.1では「雅語的／文章語」とされる。しかし、日刊紙の紙面で用例を確認するのは、さほど困難なことではない。

0.2.2で述べた4月11日は、20ページの紙面であったが、(a)(d)(e)のほかに3例、計6例の動詞「訪れ」があった。

また、2011年9月7日東京本社版朝刊は通常の40ページであるが、これを一読した限りでも、計12例を確認できる。この12例については、再度3.2で述べる。日刊紙では、相応の使用例があり、たしかに、文章語的ではあるが、「雅語的」とする必要はないと思われる。

ただし、子どもが「訪れる」を使用する、あるいは成人であっても日常生活レベルの会話で使用する状況は考えにくい。日常生活レベルの口頭語ではないといえる。

ここで見る限り、意味としては、「来る」も「たずねて行く」もある。また、共起する格助詞は「を」が多いが「に」もあるなど、簡単に説明しきれないところがある。

0.2.2で示した稿者の違和感の当否と、違和感にそれなりの理由があるとするれば、その由来を説明すべく、考察をすすめる。

1.1、1.2で示した辞書の記述に従い、「に／を」との共起関係に、動作主体と意味（「来る」か「たずねて行く」か）を合わせて整理していく。

2 近代の用法

稿者の言語意識を形成するもののひとつである、明治以降の文学作品における「訪れる」の状況を確認したい。

ここでは、新潮文庫「新潮の100冊-CDRom版」による。明治も昭和も一律に扱うのには問題もあろうが、対象とした作品に文語文は含まれず、この「訪れる」の用法に関しては、時代差は考えられない。

現在、この範囲で「訪れる」到着点が格助詞で明示されるもの計219例を得ており、それを整理する。

「を」 191例
「に」 25例

のほか「へ」が3例ある。「を」の優勢が認められる（全219例中191例：87.2%）。

2.1 「に」との共起例

到着点が「に」で示されるのは、11.4%にすぎないが、端的にいえば、しばしばそれなりの理由がある。煩雑ながら、全用例を（あ）～（の）で示す。

0.2で指摘した、定形化された表現は2例、確認できた。この形式では、「訪れる」第一義の対象は格助詞「を」で明示される人物（父／山本）であって、「場所」ではないと考えられる。これを最初に示す。

（あ）父をこの牧場に訪れたのは、丁度足掛三年前の五月の下旬であったことを思い出した。
（島崎藤村『破戒』1906）

（い）山口県室積沖の「陸奥」に山本を訪れた。
（阿川弘之『山本五十六』1965）

2.1.2 共通点の整理

他の23例についても、特徴がある。

（特徴1）「に」が単独で出現するほか、「には」「にも」などのかたちをとることがある。

近・現代語では、「をも」は文章語としては時に存在するにせよ、「かたい」印象が強い。

「をは」はかつて存在した「をば」を含めて、基本的には存在しない。

とすれば、「訪れる」その場所を取り立てるために「は」「も」を使用する場合、「に」を選ぶことになる。優勢の「を」は、この場合、不適切なのである。

（う）柱島の「大和」には、海軍省人事局の大野局員が、・・・略・・・訪れて来ていた。
（阿川弘之『山本五十六』1965）

（え）眼前には乳岩の手術という年来の悲願が達成される機会が訪れているのだ。
（有吉佐和子『華岡清洲の妻』1966）

（お）下宿の小路にはまたいつもと同じ夜が訪れてきていた。
（渡辺淳一『花埋み』1970）

（か）その幸運が、いつ自分にも訪れるかも知れない、と、先生達は思っているのだった。
（五木寛之『風に吹かれて』1972）

(き) やがて他の分野には輝かしいルネッサンスが訪れる。

(く) どの村にも春が訪れている。(池上正太郎『剣客商売』1974)

(特徴2) 動作主体は、「ひと」もあるが、意思の確認しにくい動物、または抽象概念あるいは季節や時間のほうが多い。上記用例(え)(お)(か)(き)(く)をも参照されたい。それぞれ、「機会／夜／幸運／ルネッサンス／春」である。(あ)(い)を含めて全25例中、15例がこれにあたる。

(け) (稿者注・彼が少年期以来久々に、心に快い動悸を感じて混乱したのは)彼には今日まで再びそういうものが彼の胸に訪れて来なかったからであった。

(志賀直哉『赤西蠣太』1918)

(こ) さいしょに私に訪れたのは、ありうべからざることをまざまざとみた、つよい驚きである。

(三浦哲郎『驢馬』1961)

(さ) 基一郎に僮倅が訪れた。

(北杜夫『楡家の人々』1964)

(し) そろそろ洋上に夕映えが訪れようとしたころ、ふいに敵飛行機が一機触接したのである。

(北杜夫『楡家の人々』1964)

(す) 山手の住宅地の庭に野鳥の訪れることはめずらしいことではないが、・・・略・・・

(新田次郎『孤高の人』1969)

(せ) 経済的に落ちつくのを見計らったように吟子に新しい不安が訪れてきた。

(渡辺淳一『花埋み』1970)

(そ) 五十八歳の母に近々に死が訪れることはごく当り前のことであった。

(渡辺淳一『花埋み』1970)

(た) これを逃せば、内藤に二度と大きなチャンスが訪れることはないだろう。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』1981)

(ち) それ(稿者注・わたしが存在すら知らなかった「しあわせ」)がわたしの身に訪れるなどとは夢にも思わなかったでしょう。(筒井康隆『エディプスの恋人』1981)

(つ) しかしそんな幸運がどうやって私の上に訪れてくるのか、よくわかりませんでした。

(田辺聖子『新源氏物語』1984)

なお、1.2.1『日本国語大辞典第二版』は、「③ある状態、時節がやって来る」の例に(三島由紀夫『真夏の死』(1952)を示すが、上記(け)志賀直哉『赤西蠣太』(1918)のほうが、早いといえる。

(特徴3)「訪れてくる」というかたちもある。このばあい、「来る」との共起関係から、「を」より「に」が選ばれるのであろう。上記(う)(お)(け)(せ)(つ)も同様である。

- (て) ミュンヘンに入りかわり立ちかわり訪れてくる日本人留学生の世話をしてく
て・・・略・・・ (北杜夫『楡家の人々』1964)
- (と) そのブスケが、周二たちの二階の小部屋に、巡回の一つの道順として必ず訪れてく
るのだった。 (北杜夫『楡家の人々』1964)
- (特徴4) このようなものを除外すると、言い換えれば、「なぜ、有力な「を」ではなく「に」
なのか」を説明しにくい用例・・・「には」「にも」のかたちをとらず、動作主体が「ひ
と」であり、「来る」と結合した「訪れてくる」でない・・・は、大幅に減少することにな
る。
- しかし、共通点はある。それは、「訪れる」単独ながら、意味的に「来る」に置換可能とい
える点である。
- (な) 四谷の本宅にわたしが訪れたのをいいしおに・・・略・・・外套を引っかけて飛び
出した仙吉なのだが、・・・略・・・ (石川達三『葦手』1936か)
- (に) 折からこの寺に法事に訪れた老尼から・・・略・・・ (小林秀雄『当麻』1942)
- (ぬ) 既に二度ほど別の役人が通辞を伴ってここに訪れ、調べた調べ書きを改めると
と・・・略・・・ (遠藤周作『沈黙』1966)
- (ね) 六条院に兵部卿の宮や衛門督が遊びに訪れた。 (田辺聖子『新源氏物語』1984)
- (の) 西欧の君主たちに援軍要請に訪れる皇帝たちは、西欧の人々には見慣れた光景にさ
えなっていたのである。 (塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』1991)

2.1.3

この25例から、動詞「訪れる」と到着点を示す格助詞「に」が共起する場合、そこには相応の理由があるといえる。

定形化された「～(場所)に、～(人物)を訪れる」2例・・・いずれも「ひと」が動作主体である・・・を含めて25例について整理する。

(その1) まず、現代語には、「をは」「をも」が存在しない、あるいは「かたい」印象があるために、到着点を取り立てる場合は、「を」によらず、「に」を選択することも考えられる。

(その2) 次に、1.1.1『明鏡国語辞典』の指摘する、「ひと」が動作主体な例が「まれ」かどうかについて考える。自然現象・抽象概念が動作主体になる例が多いなかで、「ひと」の例も少ないながら厳然として存在し、相対的に「まれ」というレベルではない。単純比較では、(あ)(い)(う)(て)(と)(な)(に)(ぬ)(ね)(の)の10例・・・(あ)(い)は特殊形式として除外すれば8例・・・に対し、1.1.1が正統と考える「季節・時間・状況」および「野鳥」・・・自然の一部である・・・は15例である。「ひと」が動作主体である例は25例中10例・・・(あ)(い)を除外すれば23例中8例であり、「まれ」では

なからう。比率は40%・・・もしくは、34.78%・・・である。

(その3) また、意味的には、「来る」と置換可能と考えられる。

このように、「ひと」が動作主体の「～に訪れる」は、多くはないが、20世紀後半までに、相応の条件をとらないながら、出現しているのであった。

2.2 雑誌『太陽』のばあい

合わせて、雑誌『太陽』所載の文章についても概観しておく。

整理には雑誌『太陽』のコーパス検索機能を使用した。1895年2号の、川上眉山「書記官」から、1925年14号の、延原謙の翻訳「ハートの九」までの範囲に、57例の「訪れ」がある。用例は(イ)(ロ)(ハ)～で示す。

文語文もあり、現代に通ずる口語文もあって、一様ではないが、「訪れる」に関しては、文体による差異はないと考えたい。

2.2.1 「を」の優勢

「を」の優勢について述べる。全57例の「訪れ」のうち、名詞「訪れ」は4例である。動詞としての「訪れる」53例のうち、到着点・人物が格助詞で明示されるのは、

「を」	38例
「に」	2例
「へ」	2例
「には」	1例
「にも」	1例

である。明示されるとすれば、「を」が優勢である(86.36%)。「に」の単独例2例は、定形化された「～に～を訪れる」である。

(イ) 堪へかねて光代は密かに綱雄の許を^{おとづ}音訪れぬ。

(川上眉山「書記官」 1895・2号)

(ロ) 久し振で會って行かうと、腕車を後から引かせながら歩行して其田守の家を訪れた。

(江見水蔭「朝顔」 1895年9号)

(ハ) レエトンが洞頭のビーチを訪れたのはかうした用件からであつたのだ。

(延原謙翻訳「ハートの九」 1925年14号)

また、「へ」については、現代語においてもわずかに確認できるが、用例(ニ)は場面展開からすれば、「来る」との置換が可能と考えられ、(ホ)は「訪れて来た」である。

- (ニ) 勝公は長五郎が方を逐出されて二日目、為す可き事も無いので、近所をぶらつきながら、自分が知己の與太郎が門へ訪れたのである。與太郎の女房は斯くと見るより、『おヤツ勝さんかい、まア惜しかつた事、も一歩早いと……。』『えッ。』と、眉頭を擧めて……略……
(広津柳浪「榎紅葉」 1901年1号)
- (ホ) 数日経った或日のこと、駕籠に乗った伊丹屋のお錦が、義弥の屋敷へ訪れて来た。
(國枝史郎「颯つかひ」 1925年14号)

2.2.2 定形化表現の存在

0.2で指摘した、定形化された表現は以下のとおりである。現代語と変わらない。

- (ハ) 戦死の前、廣巖寺に明極禅師を訪れて法話を請ふた一場の物語が彼を動かした。
(原 胤昭「死刑囚の最期」 1925年2号)
- (ト) 翌朝余は未決監に當のエドワード・レエトン君を訪れたところ、非常に喜んで……略……
(延原謙翻訳「ハートの九」 1925年11号)

2.2.3 「に」の単独例

「に」について述べる。定形化表現以外に、「に」は単独例はなく、「には」「にも」のかたちで1例ずつ現れるのみである。動作主体は「風」「幸福」であり、「ひと」のように意思をもつ存在ではない。意味的には「来る」である。

- (チ) 八月もまだなかば過ぎ高原には早くも初秋の風が訪れて、……略……
(新刊書紹介 1925年1号)
- (リ) 屹度今に自分にも本當の幸福が訪れるに違ひない。
(谷崎精二「淋しけれども」 1917年10号)

2.3

2のまとめとして、0.2.2において示した、稿者の「近くの梅の名所に全児童で訪れる」への違和感は、あながち、「個人的かたより」でもないことを確認したい。

稿者の言語意識に通じる、19世紀から20世紀の文学作品やその他の文章においては、動詞「訪れる」が使用されるとき、「訪れる」到着点を格助詞で明示するならば、それは、多くの場合「を」であり、「に」は少ない。そして、「に」の場合、使用されるには、しばしば相応の理由があるのであった。

動作主体が「季節・時間・状況」であれば、違和感はない。「ひと」であっても、「来る」と置換可能であれば、すでに20世紀後半の文学作品に出現していた。

しかし、当該の「近くの梅の名所に全児童で訪れる」の場合、動作主体は意思のある「全児

童」であって、自然現象や抽象概念ではないことのほか、意味的には「来る」ではないことがあり、稿者に、やはり、若干の「違和感」をもたらすものであった。

3 現代語における「に」との共起

2の調査により、「訪れる」と格助詞「に」の共起は、多くはないが否定できない、厳然たる存在であることが分かる。

また、NHKテレビ放送でアナウンサーの発話の中に聞いたこともある。

(参考例) たくさんの方が首里城に観光に訪れていらっしゃいます。(2011.10.16 NHKの
ど自慢 司会者)

「訪れる」と格助詞「に」の共起には、どのような特徴があるのか考察すべく、「朝日新聞」東京本社版を調査する。

- ・対象期間は、2011年6月24日から7月31日まで。
- ・用例は(1)(2)(3)～で示す。

すでに、1.3で簡単に示したが、日刊紙では動詞「訪れる」そのものの用例はまれではない。

3.0 「を」の優勢

はじめに、3.1で考察する、到着点を示す「に」との共起があった日にかぎり、「訪れ」の全例を確認しており、その一部を示す。いずれの日も、「訪れる」と共起するのは「を」が多く、「～を訪れる」の優位は動かない。

6月24日と、7月31日の数値を示す。この2日で、「訪れ」は全15例があった。

用例(1)(5)は「に」と共起するが、動作主体は「和平への転機／心の平和」であり、抽象概念である。他の13例の動作主体はすべて「ひと」である。(参考例1)のように到着点が格助詞で明示されないこともあるが、(参考例2)のように「を」と直接しつつ共起するものが10例ある。

(参考例1) 中心部の警察署を反政府武装勢力タリバーンが攻撃した。署は多くの市民が訪れる商店街にある。(6.24 2面 アフガン足早撤退)

(参考例2) 震災後、東北を訪れました。(7.31 5面 広告「私の旅スタイル」)

3.1 「訪れる」と「に」の共起

6月24日以降、7月31日までに確認できたのは、以下の例である。

3.1.1 動作主体が抽象概念である場合

これらは、通行の辞書が「自動詞」として認めるものである。5例確認できた。

- (1) 10年越しの戦争に、和平への転機が訪れるのだろうか。

(6.24 16面 社説「アフガン撤兵」)

(2) 世の中には「諦めるな」というメッセージがあふれている。「諦めない人に幸せは訪れる」と。(7.8 夕刊3面 映画評「水曜日のエミリア」)

(3) 閉じられた国境に変化が訪れたのは1990年代。

(7.21 夕刊2面 「もう一つのインド」)

(4) この2人、そして家族に明るい未来が訪れるといいな……と願わずにはいられません。(7.23 26面 はがき通信)

(5) (稿者注・歌舞伎で法然を演じる坂田藤十郎の発言) 藤十郎さんは、「大震災の年に演じることに、大きな運命を感じます。多くの方に心の平穏が訪れるよう、一生懸命務めたい」。(7.31 34面)

3.1.2 動作主体が「ひと」である場合

これらは辞書によって、自動詞か他動詞かの判断が一致しないものである。全18例を確認した。休刊日を除く38日間に18例が確認できたことで、「ひと」と「～に訪れる」との共起は、「まれ」とはいえない状況と考えたい。

(6) 日本オリンピック委員会(JOC)の竹田恒和会長らが25日、……略……宮城県の三浦秀一副知事を訪ね、宮城県でのサッカー競技開催を要請した。岩手、福島両県にも要請に訪れる予定。(6.24 17面 五輪サッカー)

(7) CBIRF(稿者注・米海兵隊の人命救助部隊)に防衛省は近く視察に訪れる。

(6.27 14面 「風」 立野純二 アメリカ総局長)

(8) 中尊寺には26日も多くの観光客が訪れた。(6.27 38面 中尊寺世界遺産)

(9) 提供が相次いだ昨年の9月ごろは、京大に肝移植の相談に訪れる患者の8割程度が、脳死移植を希望していた。(7.19 32面 脳死移植)

(10) 津波がすべてをさらった無残な光景。その姿を見ようという人々が、荒浜には毎日ひっきりなしに訪れる。(7.31 36面 「鎮魂を歩く」)

3.1.3 「に」との共起例の特徴

これらの18例について、特徴が指摘できる。

(特徴1) 2.1.2で見たように、「には」「にも」のかたちで、取り立ての意識がみられる。

上記用例(6)の「にも」1例、(8)(10)を含めて「には」が10例ある。

(特徴2) 目的の「に」との共起が許容される点があり、考察する。

上記用例(6)「要請に」、(7)「視察に」、(9)「相談に」が目的を示すように、他にも目的の「に」と共起する例がある。

- (11) 関西に修学旅行に訪れた横浜市立南が丘中学校の生徒が食中毒症状を訴えた問題で・・・略・・・ (7.2 29面 横浜版)
- (12) トヨタ自動車のタイ法人社長も務める棚田氏は「ASEAN各国に、自動車部品メーカーを始めとする中小企業が頻繁に視察に訪れるようになった」と指摘。
(7.10 5面 ASEAN幹事)
- (13) 避難所には、医師や看護師が定期的に巡回診療に訪れていた。
(7.8 15面 オピニオン1)

助詞の重複使用は議論の対象になる。たとえば寺村秀夫(1987)では、「子供達を音楽を教える」は非文とされ、「花子に部屋に入らせる」は許容度が高いとされる、などである。

本調査における、目的の「に」との重複の多さは、「訪れる」の意味に関連するのではないか。すなわち、「訪れる」が意味的には、しばしば「来る」あるいは「行く」と置換可能だからであろう。

到着点の「に」と、目的を示す「に」との重複使用は、動詞「行く」「来る」の場合、しばしば生ずる。「行く」「来る」が到着点の「に」と共起しやすいからである。「に」以外に、「へ」「まで」も可能だが、現代語としては、「に」の優勢は動かせない。「公園に散歩に行く」「故郷に墓参りに来る」などは許容されるであろう。

(特徴3) 意味の上では、「来る」と置換可能な例が多い。確認できた18例のうち、意味の点で、「来る」と置換可能なもの15例、「行く」が適切と考えられるのは3例である。

(6)は「行く」がなじむ。(11)の場合、中学生はすでに横浜に帰っているので、「修学旅行に行った」と理解できる。ほかに、「行く」が適切と考えられるのは次の(14)のみである。

- (14) 大事なのは、つながりを持ち続けることです・・・略・・・できれば、一度訪問した場所には複数回訪れたらどうでしょうか。
(6.30 15面 私の視点・ボランティア)

この筆者は被災地ボランティアをした後、現在は職業生活に復帰しており、自分も含めて「複数回」にわたって「行く」ことを勧めているのであろう。

(7)はアメリカ駐在の立場からすれば「来る」であろう。(8)(9)(10)は記者・発言者の視点からすれば「来る」である。(12)も発言者はバンコクにいるのであり、「来る」が適切である。他の(7)(8)(9)(10)(12)(13)以外の9例も、「来る」が適切である。

このように考えると、「～に訪れる」は、「行く」よりは「来る」と理解すべき例が多いといえる。

3.2 3のまとめ

最後に3, 0, 3.1の考察結果を、2011年9月7日の全40ページの用例12例で点検する。以下に全例を示す。

- (f) 羅先を訪れる中国人は1日平均400人。(3面)
- (g) 野田首相は温首相の訪中要請(稿者注・電話による)に「互いの都合のいい時期に訪れたい」と応じた。(4面)
- (h) 首相が滞在していた都内のホテルでは、打ち合わせに訪れた藤村氏がわざわざ裏口から出入りし、・・・略・・・(4面)
- (i) 一行は・・・略・・・「韓国国立中央青少年修練院」を訪れた。(19面)
- (j) 週末は親もキャンプを訪れ、スタッフから親への指導もある。(19面)
- (k) 3年前に母親に付き添って訪れた病院で見たポスターを思い出した。(21面)
- (l) 長野の旅第2弾は白馬を巡る。・・・略・・・まず訪れたのは長野五輪の舞台になったジャンプ場。(22面)
- (m) 県と市の担当者が6日、社務所を訪れて助成の申請を取り下げるように求めた。(33面)
- (n) 3月18日、綾里小学校に後片づけに訪れて自分のかばんを見つけた佐藤さん=写真左=(35面)
- (o) マツタケのシーズンに多い日は1日100人以上が訪れ、・・・略・・・(36面)
- (p) 宮城県石巻市で亡くなった・・・略・・・テイラー・アンダーソンさん(当時24)の家族が6日、テイラーさんが教えていた同市の万石浦小学校を訪れ、・・・略・・・(37面)
- (q) 作った野菜を置いて欲しい、と最初に店を訪れたのは、町内の農家だった。(39面)

すでに、1.3で簡単に示したが、日刊紙では「訪れる」の使用例はまれではない。ここでは、以下の3点を指摘する。

- ①「訪れる」到着点が格助詞で明示されるものは「を」が(f)(i)(j)(m)(p)(q)の6例、それに対し「に」で明示されるものは(n)の1例であって、「を」が優勢、「に」は主流ではない。
- ②唯一の「～を訪れる」の(n)は、意味の点では「来る」である。小学校に「来て」いるその状態で写真が撮影されたのである。
- ③主流の「～を訪れる」であれば、「来る」にも「たずねて行く」にも置換可能である。

4 まとめ

本稿が問題とした、「ひと」が動作主体で、「～を訪れる」のかたちをとる例は、「～を訪れる」に比して、出現の度合いは低い。近代も、日刊紙における状況も大きくは変わらず、「～を訪れる」の優勢は動かない。3.2の場合からすれば6例：1例である。

その中で、以下の点を指摘したい。

- ① 『明鏡国語辞典』が指摘する、自動詞用法としての、「ひと」が動作主体の「～を訪れる」は、現代では相応の用例があり、「まれ」とはいえないであろう。20世紀後半の文学作品にも使用されていた。
- ② しかし、「～を訪れる」が、「訪問する」すなわち「行く」の意味をも含むのに対し、「～を訪れる」は、現在でも「来る」との置換が可能なものが多いといえる。
- ③ したがって、稿者の「近くの梅の名所に全児童で訪れる」に対する違和感は、それなりに説明がつくものであった。
- ④ しかし、日刊紙でも「行く」の意味で「～を訪れる」が散見されるに至っており、今後の展開に注目すべきである。
- ⑤ 「～を訪れる」が「来る」のみならず「行く」の意味でも使用され続けるなら、それは、「訪れる」が「来る」「行く」両用の意味を有することに「裏打ち」されているからである。「来る」「行く」はともに到着点を「に」で示すことが多いのである。

本稿は、「訪れる」は自動詞か他動詞かの検討を目指しながら、基礎作業である使用状況整理に止まっている。

「おとずれる」と同じ漢字を使用し、意味も重なるところがある「たずねる」との対比、あるいは漢語「訪問」「来訪」も含めて、これらへの史的観点からの考察など、重要な事項を欠いている。

「訪れる」は自動詞か他動詞か、との議論とは別の問題である。

いずれも、今後の課題としていかねばならない。

【参考文献】

寺村秀夫ほか（1987）『ケーススタディ日本文法』おうふう

（平成23年11月9日受理）